の疊と取かへてしきたりしを、御かへりさまに、目とく見とがめ給ひ、誰かはかゝるよしなきはからひをせしとて、以の外御氣色損じ、折ふし堀尾一甫老人、あたりにさぶらはれければ、むかはせ給ひて、いかに一甫、これ見られよ、疊のやれたりとて何かくるしかるべき、われ常に費を去りぞくるを、近習の者ども心得ずして、我にも知らせず、やゝもすれば、かゝるふるまひを仕ることの口をしさよ、さいへばあまりに吝嗇なるやうにもあらるべけれども、われ一生のほど、かばかり心をつくしたればこそ、此頃の凶年にも、領分の民どもに餓死をばさせざりしが、いまは病みにほれて、心もとゞかず、たゞいはでこそやみなめとて、いぶからせたまひし、かくのたまひしは、九月末の事なり、つゐに次の十月にかくれましまし、

〔翁草五十六〕何卿とやらん、質素の人にて、小祿貧窮を申立て、綿服の願有、御ゆるしを蒙て、四季に用ひらるゝ、木綿島の單上下を拵、素々衣服悉く綿服にして、御番參内にも、裝束は當番の非藏人に預け置、途中は件の上下を著し、無僕にて往來せらる、常に自炊にて、奥方もたすきがけにて、はしりもとを働き、息女に乳母有て、外に男女の召仕なし、斯く身を約せらるゝ故に、小家領ながら、賄料潤澤に勝手向あしからず、諸拂等聊滯なく、立入者も滿足する樣にあしらはる、故に、此前東武御使を被蒙し節も、早速用意整ひ、供廻りも餘の公卿達々、結句美々敷出來て、日頃のさまとは格別の違ひ也、儉約の仕形は、少し品を超れども、花奢の過たるよりは、遙に增るべし、寛延寶曆頃

〔翹楚篇〕一世子治憲上杉○にてましませし時、國民困窮を聞召歎かせ給ひ、やがて世を繼給ひし時も、やはり此儘ならば、貧民の一助にも成なんかとの給はせしが、世をつぎ給ひしにも、果して其御言葉のごとく、御部屋御仕切料のまゝ、纔に貳百九兩壹分何程にて、御手元の御服食は、足らせ給ひし也、

〔雨窓閑話〕名君節儉并喜多見某が事